

教 仁 名 聞

第22号
(発行日)

2012年7月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

さわり多き者の道

親鸞聖人が『教行証文類』

の総序に「悪重く障り多きもの」と仰せられ、その様な者は「この行につかえ、この信をあげめよ」と、弥陀の本願に信順することをお勧め下さっている。

その「悪重く障り多きもの」とはまた「凡小」ともいわれまさに私のすがたである。

凡小とは凡夫であり小さき者のことである。

凡夫なるゆえに智見も能力も貧しい。人間としての器が小さきゆえに、自らのさまざまな楽は熱心に求めども、他者の幸せに寄与することには怠けている。

さて、現代では善人とは社会倫理に勝れている人、すなわち社会のために善を為す人、ボランティア活動とか社会の福祉のため、世の中の平和のために活動するような人、あるいは社会悪に抵抗し、批判し、行動する人、そ

う人が善き人とされている。

自分自身の安楽を求めず社会の安定のために積極的な活動をする、あるいは社会悪のために先頭に立ってたたかう人、そういう人は現代においてことに善人と称されるのであろう。

マハトマガンジーやマザーテレサ、現代の仏教徒ではスーチャーさんとか台湾で積極的な福祉活動をしている證嚴法師とかスリランカの貧しい農村で精神性をともなった独自の開発を行っているアーリアアラトネというような人々は善なる人の典型であらう。

ひるがえって自らを省みると、社会的な善に励まず、社会悪を黙認し、それを改善しようという行動も起こさず、また人の先頭に立って改革を行う様なそういう能力もなければ強い志もない。そして自分の小さな楽しみを求めている。こういう者は宿業が重く、障り多き者である。

への障りとなっているからである。

あるいは、社会悪(環境問題、各地の紛争、貧困問題、差別問題等々)がいくらかもあ

りながら目をつむり、ただ口先だけで政府批判や政治批判をし、自分自身は利害損得を離れての行動は起こそうともしない。このように自分の安楽や利益を優先しようとするのは我愛の心が強く、それが障りとなるからであらう。仏道修行に純粹に邁進(まいしん)しな

いだけでなく、こういうような社会正義の前でたじろいでいるような人間、それは凡小といひ、悪重く障り多き者といひ、悪重く障り多き者といひ、実に凡小なる者である。

こうした自分を何とかしたいと思っても、宿業のゆえに、自分を変えることができず、いつまでも相変わらずの生き方しかできない。今まで生きてきたようにしか生きられないのである。

「汝宿業の凡夫よ」と釈尊は仰せ下さるが、まったくその通りである。そして法然聖人は、このよ

うな宿業重き者を悲しみたまひ、「悪人は悪人ながら念仏申していけ」と仰せになり、阿弥陀仏は「汝、我が名を称えて来たれ、汝の全責任は弥陀が受け持つ」と招喚(しょうかん)したもう。

悪重くさわり多き者は、この仰せのまま、念仏していくほかはなく、こんな者もお念仏に身を託(たく)して生きることが許されている。

木村無相さんに
「道がある
道がある
たった一つの道がある
ただ念仏の道がある
極重悪人唯称仏」
という詩があるが、この道しか生きようはない。この道において初めて自らの人生に落ち着き与えられる。

極重悪人唯称仏（極重の悪人よ、ただ仏の名を称えよ）

という道は人に対して誇らしく語るような道では当然ない。大衆を前に宣伝する道でもない。阿弥陀様、親鸞聖人の前で、自らの粗悪さを悲しむ人たちと共に聞かせていただく道である。

自らの粗悪なことはなさないが、しかしお念仏のお慈悲によって自らの悪に僻まらず、嘆かず、また善人を誇らない道を歩ませていただく。

自らの粗悪さに僻むゆえ、他の善人、他者の善行を批判したりけなしたり、けちをつけたりしがちになるのではなからうか。

自分に対するコンプレックスはおのずと他者の勝れていることを認めたくなく、他者を自分の処まで引きずり下ろしたくなる心情にもなる。

しかし自らの愚かで粗悪なことを素直に認め、そしてそんな者にかけて下さる大悲心を有難く感じる。

そこにはからずも、他者の善を誇らず、むしろ他の人の善なる行いをたたえ、その善

を喜ぶ（随喜）ことさえあるるのである。不思議なことである。

他者の行う善をとともに喜ぶ随喜の善はその善を行うのと等しい価値がある、と先達からお聞かせていただいたことがある。そういう随喜させていただくような思いが少しでも恵まれるとすれば、それはお念仏のお徳からであろう。

そしてこういう悪重き障り多き、情けない人間にも善き縁が恵まれると、わずかながらも社会のお役に立ちえる行いをなしたり、あるいは社会悪に抵抗するような行いもさせていただくこともありえよう。実際、そういう善き縁あれば小さな善行であってもさせていたただきたいものである。

なお、金子大栄師が、自らは粗悪な者であっても、その者に働いて下さるお念仏の徳は、おのずから社会の空気を浄化していくのである、と仰せ下さっていることも非常に有難い。

（了）

正信偈に学ぶ問答

（四十二）

感染凡夫信心発 証知生死即涅槃 必至無量光明土 諸有衆生皆普化

（書き下し） 感染の凡夫、信心発すれば、生死即涅槃なりと証知せしむ。必ず無量光明土に至れば、諸有の衆生、みなあまねく化すといえり。
（現代語訳） 煩惱具足の凡夫でもこの信心を得たなら、仏のさとりを開くことができ。はかり知れない光明の浄土に至ると、あらゆる迷いの衆生を導くことができる。

*

A 「今回は〈必至無量光明土 諸有衆生皆普化〉のところですが、無量光明土というのは極楽浄土のことでしょうか。信心が発るなら、それが因となって無量光明土（浄土）に至るのですね。ここで浄土を無量光明土といわれたのはなぜでしょう」

D 『無量寿経』の異訳に『平等覚経』という經典があり、

う事態を浄土に至るとか浄土に生まれるとかいうのではないでしようか」

A 「光明が果てしない浄土こそが本来の世界、にもかかわらず私たちは妄想顛倒して自分をその殻の中に閉じこめて苦しんでいる、といわれるのですね」

D 「まあ、そう理解していただきます。これに関してですが聖人がご和讃に

罪業もとよりかたちなし
妄想顛倒のなせるなり
心性もとよりきよけれど
この世はまことのひとぞなき

と仰せられるのも、そういう道理のことではないでしょうか」

A 「では次に、浄土に至つたら、〈諸有の衆生、みな普く化す〉、ということはどういうことですか」

D 「それは浄土に至ると、仏の徳を頂いて、迷える世界の衆生（諸有）のところに還つて、あらゆる衆生を教化し救っていくという無窮の働きに参加させていただける、というところで、これは終わりのない衆生救済の働きに就くということとお聞きしています」

A 「自分だけが助かるという

信心夜話

『一蓮院談合録より』(8)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カッコ内は私の所感)

ことではなく、他の人々も助かっていく、それが南無阿弥陀仏の法なのですね」
D「ええ、そうです。すべての人が助からなくては自分の根本的な願いは完全には成就しない。自他がともに救われる弥陀の本願力のお助けにまづ自分がともかくも助けられ、さらに他の人々が助けられていく働きに参加させていただくのです」

A「そういう自他共に救われていく道においてこそ自分の救いも全うできるのですね」
D「そういえると思います。私が浄土に至るのが往相、浄土から還り来たって迷える衆生を救うていくことが無窮になされていくのが還相なので。そして往相も還相も阿弥陀仏の本願の力によって、実現されていくのであると聖人は教えて下さいます」

(了)



還城樂 (C)SHOGAKUKAN INC.

仰せに、助けてやろうとの言葉だけでは、事たらぬように思うであろうが、これは誓願の不思議と云うものじゃ。外の人が尋ねたら、如来様が助けてやろうとあるので、助けて下されると戴きましたと申せ。

*

(阿弥陀仏の大慈悲心から現れた勅命、それが本願の勅命、いわゆる仰せである。それは、流転してやまぬ一人一人を必ず浄土に至らしめようとはたらきかけて下さる大慈大悲の御力が「助けてやろう」(助ける)の仰せとなつて、南無阿弥陀仏と喚びかけて下さる。この一句を信じる、この一句を聞く、この一句に助けられる、これが信心の実際である。耳に聞こえる南無阿弥陀仏は「助ける」(引き受ける)の端的な仰せである。それほど短い言葉ゆえ、こ

れだけではあまりにも簡単すぎて事たりず、もの足りないように思ってしまう。
この仰せはこれを聞く人に思案したり、分別することを必要としないのである。端的に「助ける」の仰せをストリートに聞くばかりで済むのである。

「汝を助ける」と聞いて、その道理を分かつて、それから受け入れるとか信じるとかいうものではない。なぜ私が助けていただけなのか、どのようにして助かるのか、助けられるとはどうなることなのか、そういうことを思案して分かつたり納得して助かるような法ではない。南無阿弥陀仏の誓願は不可思議なのである。理屈も道理もないのである。だから不思議な誓いを聞いて、不思議といただくほかはないのである。聖人も「念佛は浄土に生まれるタネか地獄に落ちる業であるか、まったく私は知らない」と仰せられ、善き人から「そのまま弥陀に助けていただけ」との仰

せのままに、「はい」と信順しておられるのである。
南無阿弥陀仏とお念仏の声を聞く、その南無阿弥陀仏は「まるまる助ける」の阿弥陀仏の仰せ。それが余りにも有難くて理屈離れて赤子のように「はい」と聞いている。それだけでもう大満足なのである。聞く端的になぜか知らぬ

が、大悲の心で我が心が満たされるのである。実に単純であるが、単純でなければ一切衆生の救いにはならないであろう)

(了)

《盂蘭盆会法要》

八月十日 (金)

午後二時始まり

- * 八月十二日と八月二十二日の集まりはありません。
- * 八月二日 (座談会)・八月六日 (聖典学習会) はあります。
- * 九月六日の聖典学習会は留守のため休みます。

《二〇一一年度東本願寺基金御懇志報告》

懇志者名― (青木宏克 赤股一夫 秋常芳子 浅野真由美 足立美明 石田君代 井上守 岩田能一 宇田瑠璃子 大谷秀平 小澤謙 香川郁夫 角谷節代 笠井慶子 川端靖雄 佐藤孝幸 塩濱小代子 下野誠二 下野リツ子 城越洋一 新保弘吉 寿賀晴剛 鈴木嘉子 高橋フミヨ 田中和代 谷村往世 塚越康司 津田元親 寺坂典子 土居令子 長井一江 中野タカ子 中村喜保枝 中村憲一郎 中村駿一 中村タエ子 中村千和男 中村暢明 中村徳積 中村ホミ子 中村美重子 中村美登子 中山緑 七村文子 西塚祥子 西山泰夫 能戸昇志 長谷川式保 泰京子 濱秀子 早川森弘 林久司 菱田恵美 広瀬和代 福井靖弘 福村義明 藤村静 前田ふくの 町百合子 町嘉嗣 松村敏子 三宅真知子 宮野勲 宮野エイミ 宮野道子 宮本万里 室塚良治 森野茂治 矢倉庸義 山下明日子 山下悦子 山下博愛 山下征洋 山科春良 吉岡正人 吉ノ蘭 睦枝 亮木与志)。
総額二五〇〇〇〇円になりました。大谷派 (東) 本願寺の方に納付させて戴きます。有難うございました。

木村無相さんの法信2

昭和五十七年六月十日。ネタキリ和上苑の二階の食堂 半盲 無相

紀さん一。自室では机が低くて書きにくいので三時半ごろまでは大丈夫なので、二階の和室のソバの食堂に来て、食卓で書くことにしました。この方が高いので。

さて、もう、紀さんからタヨリあるころだなアと思って待っていましたよ。メモを見ると、前には五月三日かにお手紙もらっています。

さてお手紙のこと。
『世上、真宗の先生といわれる人が沢山あり、一体どの人のいわれることが本当なのかとまどうことがあります。』

とありますが、私も、真言から真宗へ来た(三十三年七月高野下山)当時からズット迷ったのでよくわかります。そのこと。これにはまいます、自分にナントなく、ふれる人、ふれる人、と、手さぐりにしているうちに、だんだんわかってきますよ。

*
が結局は、私は、聖典でも、聖人以外の人は読まなくなりました。

聖人のものと『歎異抄』、それ以外のものは蓮如上人のものもよまないことにしました。

なんでもかんでも聖人の書きのこして下さったものと、『歎異抄』から探すのです。

聖人のものでも、特に難しいものはダメ(読めない)で、『末灯鈔』などはよ

く拝読します
が、ほとんどの人が「あの先生」「この先生」といった人のもの

を読んで、聖人のモノに食い下がる人がすくないのです。

しかしヒトはヒト、自分は自分ですから、私は「偏依聖人」と思うほど、聖人のモノをたのみ、力にしているのです。その点、「就人立信」といつてよいのでありましょう。特に、歎異抄第二條の

親鸞におきては「ただ念仏してミダに助けまいらすべし」とよき人の仰せをこりむりて信ずるホカに別の子細なきなりが、ありがたいのです。さてそれでは、ここで「信ずるホカに別の子細なきなり」とあるが、その「よき人」は、ホカのことを言っているのではない。

ただ念仏して
とおっしゃっているのである。

ただ念仏せよ
とある「よき人のおおせ」を(信ずる)ということの「信」の実際は、信ずる信ずると自分のタノミにもならぬ、この凡夫の心をイジクまわすことではなく、

「よき人のおおせ」のまんまに、ただナムアミダブツと称えること、ただ称えること、この場合の「信ずる」ということになるといふことにさえ、気がつかされる、信ずるといふ言葉にひっかきまわされることなく、

「よき人の仰せ」のまんまに、ただ念仏申すということ、
『二河譬』でいただと、

白道にさしかかる
ということになるのでありますが、「三

定死、三定死」といつても、せつかくの、現前の「白道」にさしかかれぬということとは、ホントーの「三定死」になつていない、そういう「三定死」のどうにもならない自分ということがわかつていないから、まだ、ホントーに、どうにもならない自分とわかつていないから、まだ、余裕があるから、白道に思いきつてさしかかれないのだと思います。

ホントーに絶対絶命となれば、高層建築の大火事の時、セツパツマツテ飛びおりの、又は、消防手にマカセルコトでしょう。

*
さて、いろいろの先生がたがいろいろのことをいわれるが、

『この道を往け、とおすすめ下さる人が現代の教界には大変すくなく、心細きも感じます。』
とありますが、それは聖人が『化巻』のはじめのところ

真なる者は甚だもつてすくなく、実なる者は甚だもつてマレナリ
とおっしゃっていられるように、これは聖人御在世のころから、そうなのでしようが、いつの時代でも、真実信心のお方はいたつてすくない。

自分自身が白道にふみ込んでいる人がいたつて、マレであるから、いくら、先生、講師といわれる先生方、イワユル名師でも、学問的に知識的にしか、真宗を理解してないから、イワユル解学の人

がホトンドだから、
この道を往け
と、自信をもつて言えないのだと思うことです。

そういう「解学」と真実の学仏大悲心の「行学」の人との区別が、自分につか

ないから、迷うということになるので、先生方も先生方であるが、自分も自分で、第一には自分の信眼がハッキリと開かれていないことを考えるべきだと思ふことです。

*
しかし、どんな人にも、バックには如来さまがついていて下さることゆえ、熱心に求め求めていたら、おいおいと、真実信心の方(カタ)がわかつてくることでありましょう。

*
『二河白道』にさしかかつて、別解別行の人がよびかえすのですから、ヨホド自分自身の真実信心がハッキリしないと、「一念の信心」を得た得たと思つても、つい迷うということになるが、そこ

は一念の信において、「撰取不捨」の利益にあづかれば、いかに、別解別行の人がさそおうとも、迷いきるといふことはなく、撰取の心光によつてかえるところに、立ちかえり、立ちかえらせていただけることでしょう。

そういう力があればこそ、願力の信心
撰取不捨の利益
ともいうのでありましょう。

*
しかしそれは、真実の信をいただいた方のことで、

たまたま浄信を得ば、この信、顛倒せず、この信、虚偽ならず

ということになりましようが、信心決定しない間は、若存若妄の自力信心のくりかえしのほかはなく、いつまでたつてもおちつかぬ、ナニカモノ足りないこと、お念仏一つで、心満たされるといふことにならないであります。 (続く)